特集「人間科学とは何か」　早稲田大学人間総合研究センターシンポジウム報告

講　演

人間科学と文化人類学

蔵持　不三也[1]
([1]早稲田大学人間科学学術院)

かなり古い話になりますが、パリ社会科学高等研究院での留学時代、大型書店に行くと、「自然科学」と並んで「人間科学」のコーナーが必ず設けられていました。むろん現在もそれは変わらず、したがって私は本学術院に着任するまで「人間科学とは何ぞや」ということを考えたことがありませんでした。人間科学の裾野は非常に広い。宇宙工学のようなものはないが、少なくとも人間に関する学問はほぼ網羅されている。そう思っていたのです。その研究対象については、フランスで出ています月刊誌《Sciences Humaines（人間科学)》の特集号（第38巻、2002年９-10月号）を参照して下さい（配布資料)。

私の話の本題は、「文化人類学とはいったい何か」ということです。文化人類学はカルチュラル・アンソロポロジー(Cultural Anthropology)といいます。アントロポロジー、ドイツ的な人間学、それから自然人類学、あるいは形質人類学というところが「人類学」という言葉の最初になるわけですが、われわれ文化人類学の研究者はただ「人類学」と呼んでいる。これは、形質人類学や自然人類学を研究するプロパーからすると、甚だおもしろくないようです。人類学とは、自分たちが本家本元なのだということですね。学問の世界において、本家争いはナンセンスな話ですが、彼らには彼らの矜持、自信ないし確信というものがある。ただ、世界的に見ると、どうしても形質人類学・自然人類学よりも、文化人類学を専攻する者の方が圧倒的に多いため、最近では人類学というと一般的に文化人類学を指すようになっています。そうご理解いただきたい。

これは、私が考えるかなりアバウトな定義ですが、特定の場・人々、有意味的な時間枠の中で、構築もしくは編集する文化の形態、これを表層的ではなく構造的かつコンテクスチュアルに背景にまで着目し解読・分析する。これをモノグラフィーと言います。このモノグラフィーを他の成果と比較検討することによって、人間の営みの多様な存在様式や行動様式といったものを、現地資料や関連するデータによって探究あるいは解析する、これが文化人類学の定義と考えています。しかし、このような定義は、文化人類学者が100人いれば100人が違う答えを出すわけで、同じ人でも明日になれば違う定義をするかもしれない。文化人類学の学問的な目的は、異文化（外国文化とほぼ同義と考えてよい）に存在する多様性を、外部から見るのではなく中に入る（生活をする）ことによって、現地の人々と同じ目の高さを自分の一部に加え、見ていく。それによって旅行者的に見るものとは違う理解ができるであろうということです。

私は、留学や研究期間を含め10年ぐらいフランスに住んでいますが、さまざまな人（とくに日本人）にその話をすると、「そうですか。じつは私、パリに行ったのですよ。パリでフランス人に英語で道を聞いたのですが、フランス人というのはフランス語でしか返事をしてくれない。道を教えてくれない。不親切ですね」と言う。これが１人や２人ではなく、とくに個人旅行で行った人々から聞かれる。じつはこの言葉、われわれ文化人類学の研究者からすると、大変な問題があります。どういうことか。まず、「パリでフランス人に道を尋ねた」と言いますが、その人がフランス人かどうか、どうしてわかるのか。パリあるいはフランスで会った外国人だからフランス人だという、極めて短絡的な発想で決めつけている。もしかしたら、ドイツ人かもしれないし、イギリス人かもしれない。あるいはベルギー人かもしれません。これは、他国の人々が日本人と韓国人を見分けることができないのと同様に非常に難しい。仮に、フランス語で返事をされたのであれば、その人が多少ともフランス語の知識があるということになりますが、どうでしょう。しかし、これは大きな問題ではない。最大の問題は「フランス人は外国人に不親切である」と決めてしまうことです。つまり、自分が体験したたった一つの事例、それをもって「フランス人が」と、一気に普遍化してしまうことなのです。われわれはしばしばそういうカッコ付きの「理解」をして、何となく納得したりする。あるいは、人がそういう話をするのを聞いて納得したりする。怖いことですね。危ういことですね。これは私の授業の最初に話すことですが、たとえばここに１枚のプリントがあります。単なる１枚の紙切れですが、「これは何ですか」と学生諸君に尋ねれば、「訳のわからない字が並んでいますね」と言うでしょう。私は、それに対して何と言うか。「何を諸君はばかなことを言っているのだ。まっさらじゃないか」と言うでしょう。真横にいる学生なら「何を変なことを言っているの。たった１本の線じゃないか」とクレームを付ける。私

は文化人類学を最終的には認識の学問だと考えているのですが、たった１枚のこのプリントを説明するにも、本当は膨大な言葉を費やさなければならないわけです。にもかかわらず、われわれは「１枚のプリントに字が書いてある」、「あ、そうなの」で終わりにしてしまう。怖いことですね。

アメリカ合衆国のラルフ・リントンやルース・ベネディクトは、文化人類学ではかなり過去のオーソリティです。彼らは1930年代、「社会のパーソナリティと文化のパーソナリティ理論」というものを唱えました。あるいは読んだことがあるかもしれませんが、ベネディクトの『菊と刀』という本。アメリカが戦争もほとんど帰趨が決まり、実際に日本をどのように占領するのがよいかを検討するため、若きルース・ベネディクトという女性人類学者に白羽の矢を立てました。ただ、戦争中のため彼女は日本に来ることができないので、カリフォルニアの日系人収容所に行き、「日本人とは、日本文化とは、日本社会とは」ということを聞き、まとめた本です。この本は、戦後間もなく出版されましたが、外国人がまともに日本を語った本です。非常に珍しいということで日本でも評判になり、今もなお売れています。この本では、日本社会がまさに「菊」と「刀」で象徴されると書かれている。「日本人とは恥の文化だ」「恩や義理の文化だ」といも規定しています。それはそれで、なるほどそうなのかと思わなくもありません。外国人が、日本人を見る見方なのだとすればいいわけです。しかし、半世紀以上前の研究を今さらとやかく言うつもりはありませんが、問題が多い。なぜかというと、結局「日本人というものは」ということですが、たとえば「菊」と「刀」とは天皇（制）と武士（階層）のことで、庶民ないし一般民衆への視点はどこにあるのか。日本社会の圧倒的な人的構成が看過されているのです。義理と人情、恥云々もいいでしょう。でも、他の国にはそういうことはないのか、たとえばヨーロッパでは決闘をやっていた。あれはなぜやるのか、自分の恥をそそぐためでしょう。ということで考えると、一つの文化を特定の言葉で言い切ってしまうということは、非常に難しい。いや、出来ない相談なのです。表からだけ見て「これはこうだ」と言ってしまうに等しいわけです。「日本人は勤勉である」。これもまた、よく外国人から言われる言葉です。勤勉というのは、決して悪い言葉ではない。ありがたい、そうですか、となる。しかし、改めて考えてみると、どこからが勤勉でどこからが怠惰かという線引きはなかなか難しい。１日24時間のうち、15時間働けば勤勉だとか、そんなメルクマールはないのです。そう考えると、はたしてこの人は日本人をどれだけ知っているのか。結局のところ、単なる印象にすぎないのです。しかも、それは自分で考えたわけではなく、その人が住んでいる社会、あるいは地域の一般的な理解なのでしょう。私はそれを「イマジネール」という言葉で呼んでいます。「集団的な想像力」ということです。つまり、モナリザがなぜ名画か、名画だから名画なのである。名画という社会的な想像力があるから、われわれはモナリザを名画と言うのです。個人的な想像力であるイマジネーションが、こうしてイマジネールに規制されている。この２通りの想像力に関する話は、いささか厄介なのでこれ以上は触れませんが、「イタリア人は快活だ」といった言い方もまたしかりです。そう言う人に、「イタリア人を何人知っていますか」と尋ねれば、ほとんど知らないと答えるでしょう。むろん、何人分のデータがそろえば、そう断定できるのかはわかりません。わかりませんが、そこにはしばしば個別的事例を普遍化してしまう私たちの日常的な「理解」の危うさがあります。はたしてこのような理解でよいのか、これで国際理解なんて、とても言えるわけがありませんね。

文化人類学という学問は、おそらくこのような「モノの見方・考え方」を、フィードワークや現地調査を行いながら是正していく学問、つまり、表もあれば裏もあり、横もあるのだということを提示する学問だろうと思います。外からは見えないものを、内側から見ていくということです。そこから、私の一つの結論として「断定とは否定である」という訳のわからない言葉が出てきます。われわれは物事を言い切る。言い切らないと、話が先に進まない。「どうなの？」と問われ、「どうかな。こうかもしれない、ああかもしれない」などと言うと、「一体どうなの」と迫られるでしょう。しかし、純粋・素朴に考えると、われわれはいろいろな可能性があるのに、その可能性の一つだけをとって「これはこうだ」と言い切ってしまう。先ほど例に挙げた１枚のプリントについて言えば、そこにはさまざまな定義の可能性があり、断定の可能性があります。しかし、最終的に「これはこうだ」と言う時は、他の可能性を全部否定することになります。それがわれわれの会話であり、コミュニケーションともいえます。たとえば、私が2冊ほど翻訳をしていますルロワ＝グーランという人は、問題児で中学校を退学させられたほどでしたが、それがのちに大変な学者になる。20世紀を代表する先史考古学者で民族学者、さらに古生物学者や社会学者でもあります。彼の翻訳をしながら幾度も思いました。非常に歯切れが悪い。「・・・かもしれない」「・・・とも考えられる」といった発言は、日本だったら通用しないでしょう。しかし、それこそが学問をする者の真の姿かもしれません。少し脱線しますが、研究所時代の私の恩師アンドレ・ヴァラニャック。あるとき、かつて彼が書いた一文を引用して論文を仕上げ、先生に見せたところ、こう言うんです。「君はこのようなことを認めるのか」。いいですか、先生が書かれた文章ですよ。そう抗弁したら、どう返答したと思いますか。それは間違ってい

る。つまり、自分が書いたものではあるが、今の自分の学問的レベルからすれば誤りであった・・・。私はそこに学問する者の真摯な姿を見た気がします。

話をもどして、断定＝否定についてさらにひとこと付け加えておきたいことがあります。われわれは日常的な会話の中で、しばしば簡単に「ない」と言いいますが、もうおわかりですね。本来「ない」とは簡単には言えないものなのです。探し物を言いつけられて「あったのか」「ないです」と、簡単には言えない。言えるはずがない。それを正確に言うには、「私が探しに行った限りでは見つからなかった」と言わざるを得ない。私が探していない所にはあるかもしれのだから。これが断定＝否定ということです。

話を少し進めましょう。まず一つ、視座としての「ポリフォニー」というのがある。これは何か。モノフォニーというのは単旋律で、たとえば日本の仏教世界だったら声明というのがあります。お坊さんの合唱みたいなものです。これがキリスト教の聖歌だとポリフォニー、つまり多声・多旋律で歌が展開する。文化人類学の根幹はまさにこれだと思うのです。つまり、いろいろな角度から物事を見ていかなければならないということが一つ。もう一つ、私が創った言葉で「示標性」という生物学から借りてきた概念がありますが、私流に解釈すると「モノが発信する情報」ということです。たとえば、案山子が立っている。じつは、案山子はわれわれに大変な情報を発信している。案山子がそこにあるということから、その地域の生活形態や自然環境までが見えてくる。案山子はどういうところにあるか。地平線まで続くような麦畑に案山子などない。たとえ10羽のカラスがそこにやって来て、麦の穂をついばもうとしても、勝手についばんでいけということになるでしょうが、米作ではそうはいかない。基本的に米作は、１反１枚の田んぼが非常に狭いので、そこに10羽もカラスがやって来て、丹精込めて作り上げた稲穂をついばまれたらたまったものではないでしょう。つまり、案山子がいるということは、そこでは米作が行われているということを意味し、米作が行われているということは、集約的な農業が営まれており、それを支える人手が多いこともわかる。気候的なことも当然見えてきます。水利の問題も出てくるでしょう。当然、ただ米を作っているだけではない。農民は自分でも若干消費しながらも、米の多くを売らなければならない。そうなると、販路という問題が出てくる。さらに、米をいかにして食べるかという技術の問題、消費技術の問題も出てくる。つまり、米作の文化・稲作文化というものが、案山子一つ立っているだけで見えてくるのである。もちろん案山子は何も言ってくれませんが、いかにしてその声なき声を聞き取り、示標性をかぎ取って、その地域社会や人々の生活のありようをポリフォニックにえぐり出していくか、これが文化人類学のある意味での醍醐味と言っていいでしょう。そこでは「生態系としての文化」というものが考えられます。エコシステム＝自然の生態系と同じように、文化にも生態系というものがあるということ、つまり、他のさまざまな要素と繋がって一つの生態系、文化の生態系（エコ・カルチャー）を作っているということです。何かがなくなれば、他の物にも影響が及び、最終的にはその有機的な連関が崩れてしまう。したがって、そこに存在するのは「社会の深層構造」です。表層を語るのは子どもでもできる。しかし、目に見えないところまで見ていかなければならない、これが文化人類学者の学問的使命ということになります。

最後に一つだけ事例を挙げたいと思います。トロブリアンド諸島という所があります。地図を見れもらえればわかりますが、パプアニューギアの東北方に点在する島々です。ここに「クラ（Kula）」という一見おかしな慣行があります。クラリングと呼ばれる諸島内で、貝殻でつくった首飾り（ソウラヴァ）と腕輪（ムワリ）を、それぞれクラリング内で反対方向に回す。つまり、隣の島から来たら、また隣の島へ回していく。首飾りにしても、腕輪にしても、経済的にはそれほど高価な物ではない。にもかかわらず、島の若者たちはアウトリガー付きの丸木舟で隣の島まで行く。隣の島といっても、すぐに行って着けるような島ではありません。時には何週間、いやひと月以上もかかる。当然、その間には嵐に襲われることもあるでしょう。命懸けです。考えてみてほしい。買えば５万か10万くらいの物のために、若者たちが大勢で命を懸ける。あり得ない話、ばかばかしい話ですね。しかし、彼らは苦労を重ねて、いわば自己犠牲と引き換えに、称賛や名誉、地位、そして尊敬を手に入れるのです。ここまでは表層として理解できるでしょう、では、その深層構造は何か。ある島の若者が、隣の島に腕輪を持っていく。「はい、どうぞ」「ありがとう」だけでは終わらない。「ご苦労さまでしたね。ところで、そちらの調子はどうだい」と世間話のようなものが交わされるはずです。「じつは、うちの島ではこの前こんなことがあって・・・」「そうなのか、こっちの島ではこんなことがあった」「向こうの島ではこんなことがあった」といった形で、諸島内で情報交換されていく。クラリングの大事なポイントは、むしろこうしたことなのです。「お前たちはこの島で起こった出来事を、命を懸けて隣の島へ伝えに行け」と言われても誰も行かない。そこに、首飾りや腕輪を介在させる。当然、首飾りなり腕輪なりには物語性や神話性というものが付いており、一説には呪力すら帯びているといいます。これを象徴的価値と言い換えてもいいでしょう。「島に来たら、その呪力が祟りをなすからすぐ隣の島に持って行け」というのです。ともあれ、これを「象徴交換」と

いいます。社会学でも使う語彙ですが、この象徴的な情報交換によって、島々の社会が存続するということになるのです。これが物事の深層構造、つまり裏側を見た、あるいは横を見たということです。

こうした象徴交換は、じつはトロブリアンドから遠く離れたわれわれの日常生活でも行っている。たとえば、挨拶。最近の若者は「お疲れさま」と言う。これから学校や仕事に行くのに、「お疲れさま」という訳のわからない、間尺に合わない挨拶を交わす。私などは唖然として、「ちょっと時間が違うんじゃないの」と言いたくなりますが、あくまでも若者言葉であり、それはそれでよいでしょう。しかし、なぜ挨拶をするのか。友情の証、親愛の証、いろいろな意味がある。大切なのは思いであって。言葉ではない。ただわれわれは、その思いの身代わりとしての言葉、つまり象徴物を使って自分の気持ちを伝えているのです。したがって、挨拶の言葉なんかどうでもよい。「パッパラパー」でもよい。こっちで「パッパラパー」、向こうでも「パッパラパー」、あちこちで「パッパラパー」。何となく楽しくなるのではないですか。これもまた私の考える文化人類学の対象となりえます。